

山田裕康先生と私

小 山 忠 則*

前日、友人から訃報を受け、取るものもとりあえずゼミの同期の友人数人と御通夜に駆けつけてから、早いものでもう一年経ちました。その日は未だ梅雨が明けていなくてとても蒸し暑かった事、そして何よりも祭壇の写真の山田先生の笑顔をよく覚えています。療養中にも連絡は取り合っていましたし、大学に復帰された後も、もう少し体力が回復されるのを待って、私達ゼミ一期生の集まりに来ていただける事を楽しみにしていただけに、その日は本当に言葉がありませんでした。

最後にお会いしたのは2008年11月27日、シカゴを中心に活動するミュージシャンで、山田先生の友人であるクラークさん、パートナーで大阪出身のシンガー、ヨーコさんのバンドのライブに私達を誘っていただいた時です。後から思えばその時点でかなり体調は思わしくなかったのでしょうか。その何ヶ月か後に、「正直言うとあの時誘ったのは、自分の体の事を自覚して、もう君達には会えないかも知れないと思ったので」というメールが来てちょっと驚きました。と言うのもそのライブの後山田先生は、ビールをハイペースで手酌で飲んでいて、私達は前々から体調優れないとは聞いていましたが、それを見て気遣いながらも何となく安心もしたからです。その後、療養の為しばらく大学を休まれる前には、病状の説明と共に「くたばりかけたら君に連絡するので、いつもの連中に連絡とってくれ。しかし簡単にくたばってたまるかと思っています。」とメールがあり、とても複雑な心境の中にも早く回復して、従来のような生活に戻りたいという強い意思を私はその際に感じたのですが。

アメリカ文化や音楽に関する研究の他にも、翻訳者としての業績も数々残された山田先生ですが、私にとって忘れられないのは、ゴスペル研究家 Anthony Heilbut の *The Gospel Sound: Good News and Bad Times* (Simon and Schuster, 1971) の訳書刊行に共訳として参加された事です (ゴスペル・サウンド、アンソニー・ヘイルバット、中河伸俊／三木草子／山田裕康 共訳、ブルース・インターアクションズ、1993、その後2000年に改訂版刊行)。私のようなアフロ・アメリカンミュージック愛好家にとっては避けて通れないゴスペル音楽ですが、その「ゴスペルのバイブル」と言われてきた同書の翻訳版が出版された事は、その当時多くの研究者、愛好家から賞賛され、実際にアフロ・アメリカンミュージックのバックグラウンドの理解に大きく貢献したものと思います。現在も増刷を重ねている事がそれを証明していると言えるでしょう。私自身も座右の書として数え切れない程参照し、

* 1982年経済学部卒業

初版は背表紙が割れてページが外れてしまった程です。

音楽，書籍，映像など素晴らしい作品に出合った時，同好の知人に対して，この良さは絶対に共有出来るのではないかと思ひ込む癖が私にはあり，山田先生にもこちらから勝手に CD や DVD などを送った事が何度もあります。その都度その作品へのコメント付きのお礼状やメールをいただき，逆に忙しい中煩わしかったに違いありません。そして昨年の夏以来この一年の間にも，感動的なライブや，発掘音源，書籍などにいくつか遭遇しました。そうした中，今でもごく自然に，これは守備範囲内に違いないとか，いや少し違うかななどと，ふと山田先生の事を想い出してしまいます。私の永年のこの癖，今後も直りそうにないようです。